

大学院の現在と将来・夜間大学院

大阪教育大学大学院

「健康科学専攻」の概要

塩見 昇

しおみ・のぼる

大阪教育大学・教育学部

大阪教育大学では一九九三年四月から大学院研究科修士課程に社会人を主たる対象とする夜間大学院（健康科学専攻）を開設した。国立の夜間大学院は筑波大学に次いで二つ目の設置であり、九五年三月には第一期生が二年間の課程を修了している。第四期生の入試選考を終えた時点におけるその概要を紹介する。

設置の経緯

夜間大学院の設置に至る前段として、教育系大学・学部の再編成（教員養成を目的

としない学科、コース等への再編）という全国的に共通な動向があり、加えて本学の場合には大阪市内から府下柏原市への移転統合という年来の課題が重なって、他の大学にない大規模な改革再編が八〇年代末から進められた。具体的には、学生定員の約四割（四百五名）を割いての教養学科の設置である。

一九八八年四月、教育学部の中に教員養成課程と並ぶ形で設置された教養学科は、従来の教室から教員の一部を割いて十三講座に編成し、七専攻十五コースからなる。設置当初より修士講座として近い将来の大学院研究科の担当が予定されていた。

教養学科は発足直後の一九九〇年に新学部構想検討委員会を設け、大学院研究科の準備に着手した。教養学科の研究教育組織の特色を生かした新しい大学院を目指し、一年余の検討の末、翌年六月、四専攻からなる「人間文化総合研究科」（修士課程）の設置構想をまとめ、概算要求に盛り込んだ。九二年にはいってさらに構想を煮詰め、九三年度概算に向けての文部省折衝を重ねる中で、「特色のある研究科を」

との文部省側の強い示唆もあって、移転後の天王寺キャンパスを使つての社会人を主たる対象とする夜間大学院という構想が浮上し、急遽、五専攻プランを準備することとなった。

四専攻の計画を五専攻に膨らませることの無理、当初は考えていなかった「夜間」へのとまどい、二つのキャンパスに分れての研究教育によって当然生ずる勤務の負担増、具体的にはどの講座がそれを担うか、といった問題が限られた時間の中で論議された。その結果、当初「人間生活」専攻として構想されたものを二分し、生涯教育計画論講座、健康科学講座を主担講座とし、発達人間学、スポーツ、生活環境講座が協力する新専攻を夜間に設置する方向が固まった。計画をめぐつての文部省とのすり合わせの中では専攻の名称が最後まで残つたが、最終的に「健康科学専攻」とすることになり、学生定員十名の夜間大学院が九三年四月に発足することとなった。

なお、教養学科に基礎を置く本学の大学院は、同時期に「総合基礎科学専攻」が誕生し、その後年度を追つて、「国際文化専攻」、「芸術文化専攻」が設置されている。

専攻の趣旨と 研究教育分野

新研究科の構想検討に当つては、
(1) 社会の高度化や情報化・国際化にともな
ない、幅広い見識の上に高い実践能力

と研究能力を備えた専門的職業人の組織的な育成が、社会の各方面で大きな課題となつてきていること

(2) 民間企業 や官公庁 等で多様 な職務に 携わる社 会人の能 力開発や 再教育を、 大学院で 行なうこ とを求め る声が高 まつてきていること

が考慮されたが、とりわけ夜間大学院に関してはその側面が強く求められるし、また特徴を活かし得るだろうと考えた。

生涯教育計画論と健康科学講座が主担講座となることから、この両講座の関係分野を軸に八研究教育分野を設定した。その相互関係は図1の通りである。この専攻を「健康

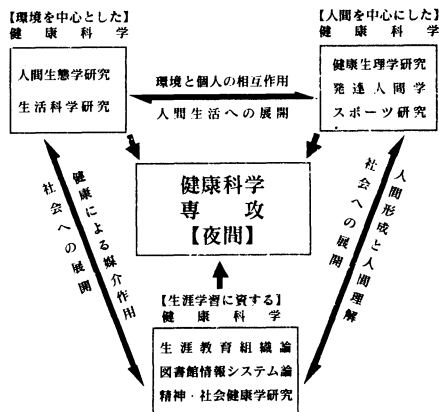


図1 研究教育分野の相互関連

「科学」の名称で包括するのは決して分かりやすいものではなく、参加講座の間でも違和感が強い。さしあたって近い将来、研究教育分野と教員スタッフの整備により「健康生活」「人間生活」の二コースへの改編が少なくとも必要と

研究教育分野	授業科目	研究教育分野	授業科目
人間生態学研究	人間生態学特論 人間生態学演習 健康教育学特論 環境健康学特論 環境健康学演習 人間生態学ゼミナールⅠ 人間生態学ゼミナールⅡ	生涯教育組織論	生涯教育組織論特論 生涯教育組織論演習A 生涯教育組織論演習B 学習社会論特論 生涯発達論演習A 生涯発達論演習B 生涯教育計画論特論
健康生理学研究	健康生理学特論 健康生理学演習 健康栄養学特論 生体制御学特論 生体制御学演習 健康生理学ゼミナールⅠ 健康生理学ゼミナールⅡ	図書館情報システム論	生涯学習と図書館 図書館情報システム特論 図書館情報システム演習A 図書館情報システム演習B
精神・社会健康学研究	地域健康福祉論特論 地域健康福祉論演習 精神・社会健康学ゼミナール 精神健康学特論 精神健康学演習 神経心理学特論 健康行動論 健康行動論演習	発達人間学	発達人間学特論
		スポーツ研究	スポーツ基礎科学特論 スポーツ基礎科学特論演習 スポーツ運動学特論Ⅰ スポーツ運動学特論Ⅱ
		生活科学研究	食生活科学特論Ⅰ 食生活科学特論Ⅱ 衣生活科学特論Ⅰ 衣生活科学特論Ⅱ
課題研究			

表1 授業科目 (1995年度)

考えている。現在の担当教員は専任十二名、兼任三名、非常勤二名で、授業科目は表1の通りである。

志願者 在籍者

この研究教育分野とカリキュラムから当初、主な志願者として、医療・看護関係の現職者や研究者、社会教育をはじめとする生涯学習関連の公務員・民間の現職者、生涯スポーツ関係者、学校教員などを想定した。「社会人を主とする」という設置の趣旨から、現役の学部新卒者については社会人の志願状況を勘案して「受け入れも可能」という程度で考えることにした。

初年度以来の志願者、入学者等の状況は表2に示す通りで、定員十名に対して非常に多くの志願者があり、社会的ニーズの大きさを実証している。
入試は各研究教育分野ごとに詳細な研究計画の提出を求め、面接と小論文執筆を課し、外国語は実施していない(分野ごとの定数はきめていない)。

	1993	1994	1995	1996年度
出願者	68	61	68	88
受験者	68	61	68	87
合格者	17	20	20	21
入学者	17	19	20	(20)

表2 出願状況

(注)学生定員は10名。1996年度入学者は予定数

高等教育整備が重点的に進められていることから生ずるニーズで、いましばらく続く傾向と思われる。生涯学習の関係では、図書館やスポーツ施設、教育委員会等で働く現職者のほか、生涯学習・生涯発達について研究したいという比較的高齢層の一般社会人などがあり、小中高校の教員も若干含まれる。新卒者は一名程度である。入学者の平均年齢は毎年三十五〜四十二歳くらい（これまでの最年長入学者は七十二歳）で、志願者の層は年々多様化の傾向にある。今後、研究教育分野を拡充することで、社会人学習の場としての一層の広がりが見込まれる。

大学院教育の

特徴

三年目を終えようとしている現在、夜間大学院の教育はなお模索の段階にある。

大阪市内の交通至便の場（天王寺）にあるという立地条件が夜間の学習を可能にしていることは確かだが、老朽化による転出校舎を使っているという施設の悪条件はいかんともしがたい（今後、天王寺キャンパスを大学の生涯学習事業として再開発する将来構想はあるが）。昼夜にわたって柏原・天王寺の二キャンパスかけもちが教員にとって厳しいことも否めない。

学生の多様さにもとまどいは大きい。修士の学位取得を明確な目的としている看護・医療技術関係の教員が相当数

を占める一方、現職研修や生涯学習としての学習を志望する人も少なくない。年齢幅も大きく、各研究教育分野について相当の専門家もいればまったくの初心者もいる。修士論文についてはそれぞれ事前に詳細な研究計画を提出してもらい、課題研究で個別指導を行なっているが、一般の授業となると焦点の置き所に腐心しているのが実情であり、自分の関係分野の研究を深めたいという学生には不満が残るのでは、と危惧されるところである。昼間フルタイムで勤務している人が二年間で修士論文をまとめることの厳しさは想像に難くない。

こうした問題は山積するものの、入学者の意欲と熱意は極めて旺盛で、多様な社会経験をもつ人たちの相互啓発と交流のメリットが随所にみられる。ゼミの中で一番若いのが指導者である教員だといった経験は、大学教員として新たな刺激と緊張を覚える体験でもある。

図書館情報学を専門とする私の場合でいえば、図書館情報システムを研究教育分野に選んだ学生は、九六年度予定者を含めて現職図書館員三名、研究者二名、大学職員一名、小学校教員一名で、この人たちは当然図書館についての研究を志向している。しかし授業としての「生涯学習と図書館」・「図書館情報システム演習」には図書館について学ぶ

のはまったく初めてという学生が大半を占める。この人たちをも視野に、図書館についての基本的な学習と、それを各人の研究課題と結び付けての理解と関心を深めてもらうのは容易なことではない。しかし、初めての経験だけに、予期以上の興味をもってくれることもあり、それはそれで大きな楽しみでもある。例えば、看護関係の研究者が病院図書館や患者サービスの重要性を認識してくれることの意味は大きい。そうした試行錯誤は教員それぞれが日々重ねているところである。

将来の課題

こうした実態の下で、夜間大学院の将来展望となると、大きな可能性と山積する課題の大きさが認められる。大学の社会人への開放という点では、学位取得を一義的な目的とするよりは、様々な社会経験を持つ人たちが現職教育として、あるいは生涯学習として研究、学習を深めたいというニーズに応じることが重要であり、それを通常の大学教育とも接点のあるものとしていくことは大学教育の活性化にとっても意義深い。

それには大学が直面する研究教育体制のリストラといった姑息な対応ではなく、大学教育のあるべき姿を探る中でしっかりと構想と条件設備の下で進められねばならない。それだけの豊かな展開の可能性を含んだ分野であり、

チャレンジングな課題であると思う。

本学の「健康科学」専攻の将来については、発達人間学、職業科学、健康看護学、大学教育開放、などの新たな研究教育分野を拡充整備し、学内外からのスタッフの補強を図ること、学生定員の増加、二コースだてへの再編を企図している。その上で博士課程の設置をも目指している。

なお「夜間」の就学について留学ビザによる外国人留学生の受け入れを入国管理局が認めていない現状は、国際化を標榜するなかで極めて不合理である。大学（院）教育が昼間のものという前提に立つのは誤った認識であり、国のレベルで関係機関が協議し、早期に改める必要があることを指摘しておきたい。

